

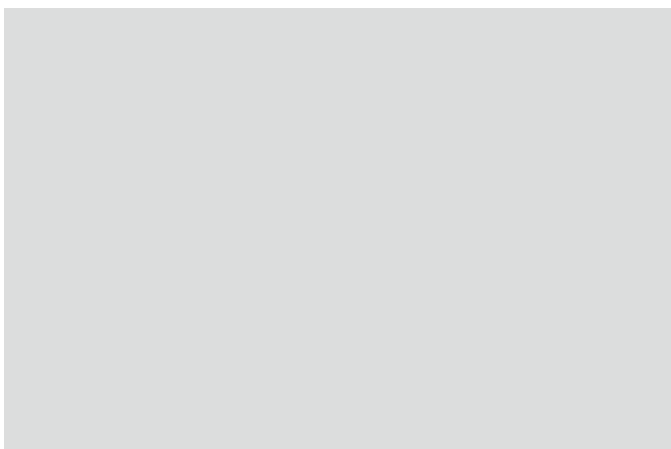
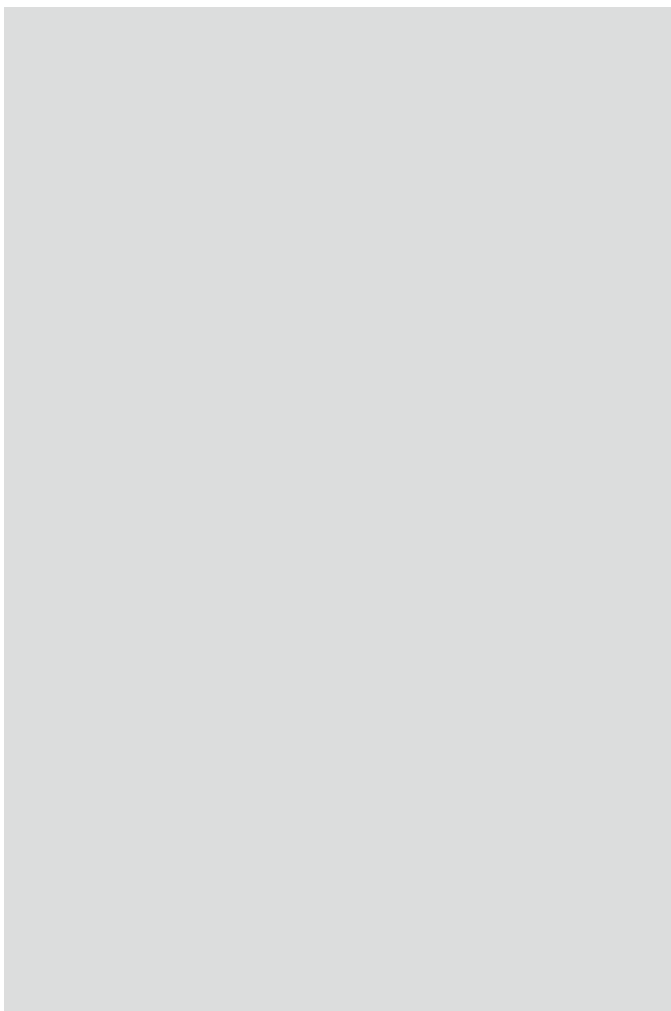
終える命、

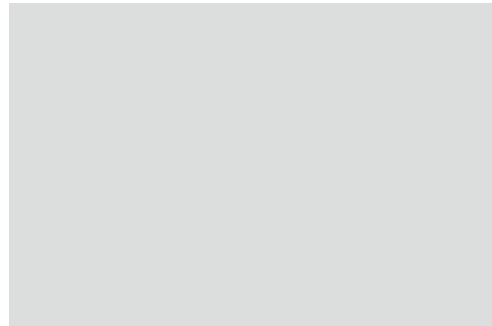
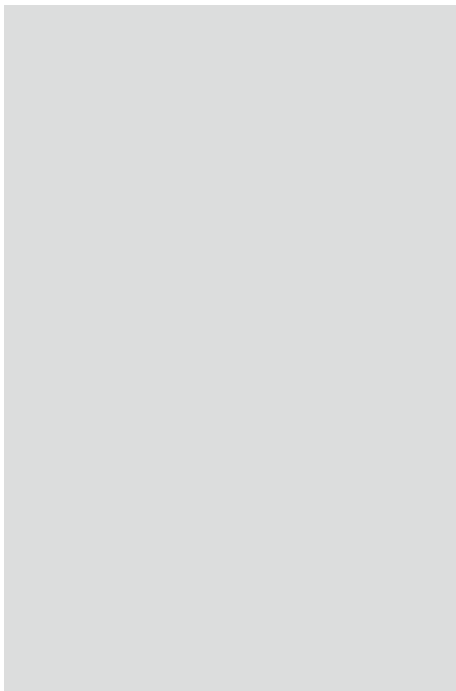
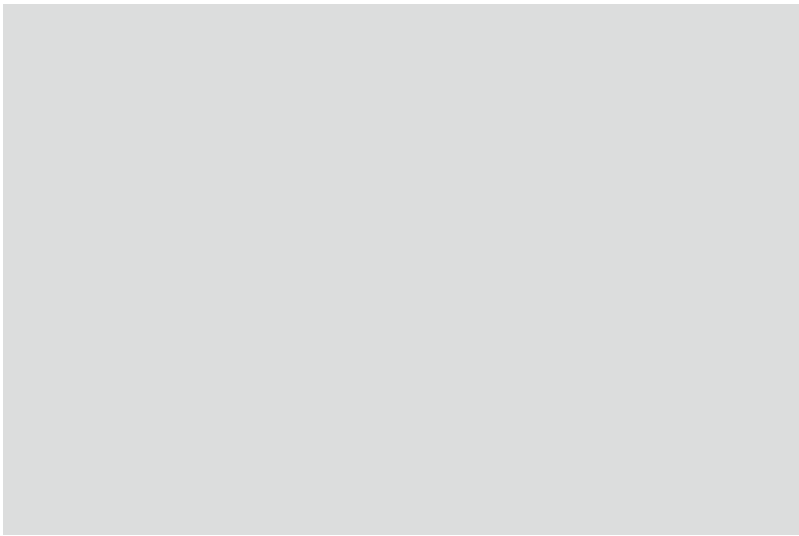
つなぐいのち

國森
康弘

第10回 まちに飛び出す南相馬の医師

※本連載は、本文のみ無料でお読みいただけます。
写真は、冊子版でのみご覧いただけます。





外に出て、
自分たちの手で
まちづくりを。

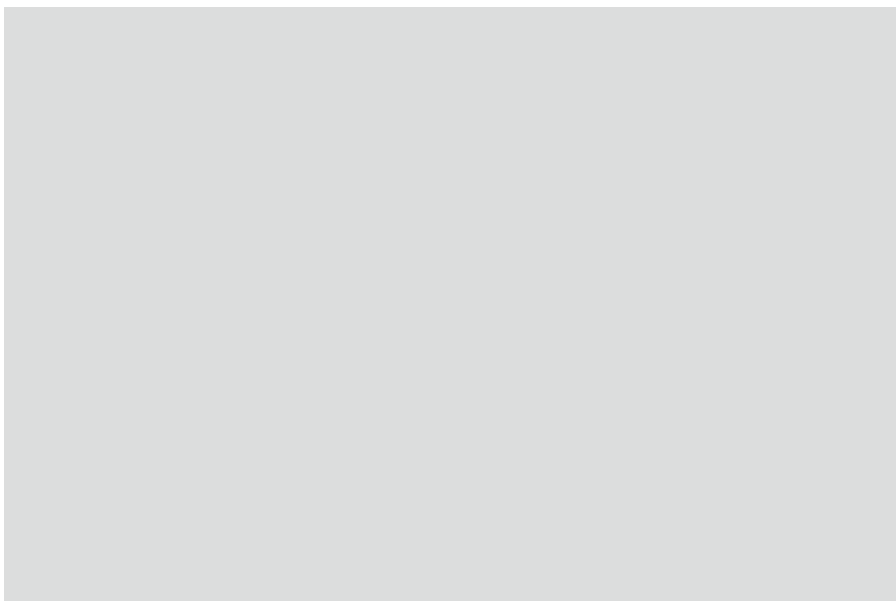
福

島県南相馬市では、東日本大震災と原発事故によって、人口7万のうち6万もの人が避難した。現在ではようやく5万人ほどに戻ったが、子どもの半数は戻らないまま。自宅で親や祖父母の介護をしていた女性が、あるいは看護や介護の専門職に従事する女性が、子どもと一緒に避難することも少なくない。病院や施設は閉鎖され、家族、ご近所もばらばらに。まちの「ケア総力」は激減した。亡き人を思いながら精いっぱい、自分らしく生ききって命をまっとうし、次の時代に「いのち」をつなぐ――。そんな晩年をいかに支えていくか、南相馬市立総合病院の医師たちは考えた。

「自分たちが病院を出て、まちへ飛び込もう」。

2012年4月に在宅診療科を立ち上げる。訪問看護や介護の事業所と連携を深めつつ、がんを抱えながら仮設住宅で1人暮らしするおばあさんや、家族の介護に頼れない寝たきりのおじいさんのもとへ訪問する。

さらに、懸念されたアルコール依存症やうつ病、自死……。これらを減らすために、医師らは、地元の専門職や支援団体、さらに面倒見のいい市民たちとつながっていく。たとえば、近所づきあいが苦手で孤立しがちな中高年世代の男性たちに、「自宅や仮設から出



て、一緒に打ち込もう」と声をかけて始めた「男の木工」。プロの指導を得て、趣味の域を超えた本格的な木工製品を生み出すようになった。病院の医師や職員も毎週参加する。それから、仮設住宅の折り紙サークル。「震災を忘れないよう、世界中の人に買ってもらう」と、医師らがマーケットづくりに奔走した。ほかにも「男の料理」やヨガ教室、ハイキング、ラジオ体操、エッセイ講座などの市民講座も行なってきた。

地域の介護力が弱まったなかで、まちを維持、再生するには、医療や介護、福祉の視点を十分に取り入れたうえで、人々のつながりを再構築する「地域づくり」が欠かせない。「ぼくらは被災者で終わっちゃいけない。自分たちの手で未来ある『まちづくり』を、少しずつでも前に進めたい」と在宅診療科の根本剛医師。

在宅で最期までという市民の願いには、一定程度応えられた。一方で、老老介護で疲弊する家族もいる。看護師が増えれば、より多くの入院ベッドが使え、院内に訪問看護ステーションをつくるなどして、「退院にいちばんいい時期」を見定めて自宅に戻ってもらうことも可能になる。このまちで「いのち」をつないでいくために、往診医や産科医、小児科医もさらに求められている。

（2012～13年撮影）

くにもりやすひろ●写真家。イラク戦争を機に新聞社から独立し、紛争地や貧困地域などの現実を伝えてきた。2008年から日本の「在宅看取り」の現場を撮り始める。写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』シリーズ（農文協）ほか。